

○永平寺の伽藍と建造物

道元禅師は寛元2年(1244)越前国志比荘の地に大仏寺を開創し、寛元4年には永平寺と改称した。770年以上の歴史の中で、永平寺は多くの火災に遭い、また遠忌などに伴い幾度かの伽藍整備を行ってきた。



上空から見た永平寺

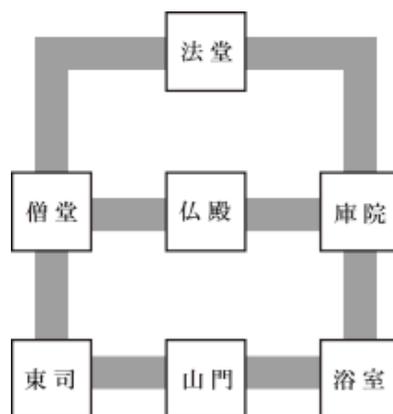
現存する伽藍は近世から近代に整備されたもので、その境域は僧侶の修行・生活などに関わる法務的区域である七堂伽藍と一般檀信徒を対象とした檀務的区域に分けることができる。

七堂伽藍内にある仏殿、法堂、山門、中雀門、僧堂、大庫院、大光明蔵、監院寮、廻廊(5棟)、承陽殿本殿及び拝殿、承陽門、経蔵、松平家廟所門、舍利殿及び祠堂殿、勅使門の計19棟は令和元年度に国指定重要文化財となった。

○禅宗の七堂伽藍

伽藍とは、サンガーラーマ(僧伽藍)の音写。もともと僧衆が居住する園林のことであるが、僧侶の住む寺院堂舎の称として用いる。

七堂伽藍とは、七つの堂宇が配置された寺院のことで、禅宗では法堂・仏殿・山門・僧堂・庫院・東司・浴室からなり、回廊によって結ばれる。



山門 寺の玄関に当たる門。総門と仏殿の間に位置する。

仏殿 本尊を安置する建物。

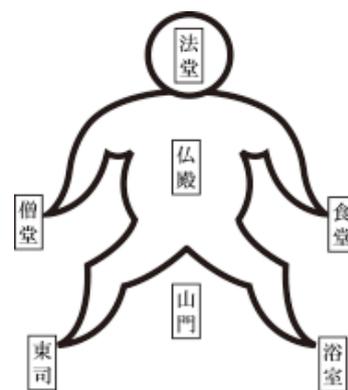
法堂 住職が仏に代わって修行僧のために上堂して法を説く建物。説法堂の意。

僧堂 修行僧が坐禅・食事・睡眠など、修行を行う中心の建物。中央に文殊菩薩を祀る。

庫院 庫裡ともいい、食糧などを蓄える倉庫・蔵の意で禅寺の台所に当たる。

東司 東浄とも呼ばれる禅院の厠・便所。

浴室 禅院の風呂場。僧堂・東司と合わせ、談話を禁じる三黙道場と呼ばれる。



○永平寺七堂伽藍の変遷

永平寺開創当時の伽藍配置について、『永平開山道元禪師行状建搨記』には、仏殿、法堂、僧堂などの記述がすでに見られ、道元禪師示寂後には二祖懷奘により他の寺院の開山堂にあたる承陽庵が建てられた。三世義介は、山門、回廊を建立し七堂伽藍を整え、三尊像、祖師像、伽藍神などを安置した。



伽藍神立像 監齋使者

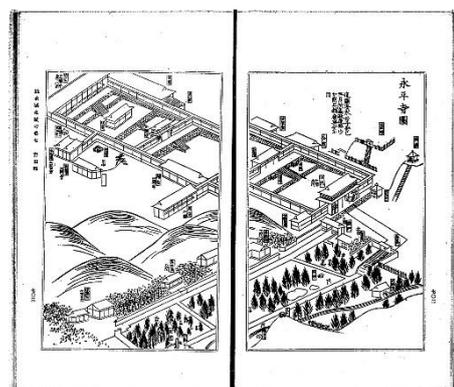


永平寺全図

現存する最古の伽藍図は 17 世紀後半とされる「寺境絵図」である。七堂伽藍は山門・仏殿・法堂

が中軸上に並び、仏殿の東西に大庫院と僧堂、全体の北西部に承陽殿（開山堂）という配置は現在と同様であるが、法堂の奥に大殿とある点は異なる。

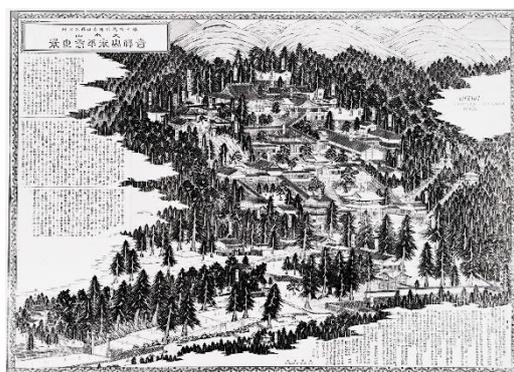
七堂伽藍の外、南西部には、霊梅院、長寿院、隆昌院、地藏院などの塔頭寺院の名前が見える。この塔頭寺院が建つ南西部は、江戸時代後期以降、一般参拝者の増加に対応するための受付や宿泊施設等が建てられる区域として整備・拡張されていく。



永平寺伽藍図(1816年)国会図書館所蔵『越前名蹟考3』より

明治から昭和初期における永平寺の伽藍整備は、大規模なところでは3度行われている。明治12(1879)年の火災による承陽殿の再建、明治35(1902)年の高祖六百五十回忌と昭和4(1929)年の二祖六百五十回忌に際してのものである。

明治31(1898)年印刷の伽藍図を見ると、七堂伽藍では、北西部の承陽殿周辺に多くの建築物が建ち、承陽殿も東面して再建されている。北東部には、監院寮、瑞雲閣光明蔵、不老閣、妙高臺、宝蔵などが見える。七堂伽藍外、南西部では塔頭寺院のいくつかは廃絶し、周辺には各



大本山吉祥山永平寺之景(1898年)

地の吉祥講宿坊が建てられている。

大正 15 (1926) 年発行の「曹洞宗大本山永平寺改築全図」は、昭和 4 (1929) 年の二祖六百五十回忌に向けた伽藍整備の途上のものである。

七堂伽藍では、大庫院と大光明蔵が建てられ、東側の法務区域全体が整備されている。かつて北東部に所在した宝蔵は北西部に移動している。

七堂伽藍外は、大正 14 年の永平寺口から永平寺門前までの鉄道開通などもあり、大参拝時代を迎えたため、大幅な再整備がなされている。舍利殿を東に移築し、その旧地には檀信徒の位牌を置く祠堂殿が建ち、通用門の位置も現在の場所へと移動した。宿坊も整備され旧越前宿坊が解体・移築され玲瓏閣となり、隣り合う形で傘松閣 (2 代目) が建てられた。この再整備により、七堂伽藍と一般参拝者を迎えるための区域が明確に分化されつつも一体化する現在の永平寺伽藍の基礎が完成した。



曹洞宗大本山永平寺改築全図 (1926 年)

○永平寺の七堂伽藍

- ① 山門 七堂伽藍のうち、勅使門の内側、中雀門の前に立つ門。1 階梁行を二間、2 階梁行を三間とする二重門で、彩色は施されていない。建築年代は、棟札より延享 4 (1747) 年上棟、寛延 2 (1749) 年落慶と分かる。山門両脇には明和 8 (1771) 年造像の四天王像、楼上には十六羅漢等が安置されている。中央の扁額は後圓融天皇御宸翰のもの。



山門新旧写真



十六羅漢新旧写真

- ② 佛殿 山門・佛殿・法堂を結ぶ中軸上、七堂伽藍の中心に位置する。佛殿の須弥壇には過去・現世・未来に顕現する阿弥陀仏・釈迦牟尼仏・弥勒仏の三世如来が祀られている。現存する佛殿は高祖 650 回忌に際する伽藍整備の中で明治 35 (1902) 年に建築されたものである。

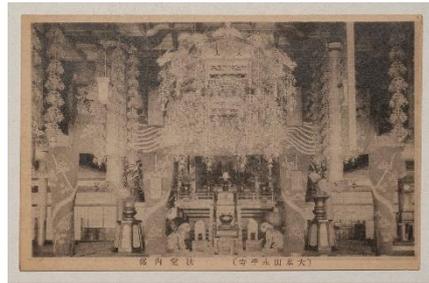


仏殿新旧写真と三世如来

- ③ 法堂 七堂伽藍のうち最奥、仏殿の奥に位置する。法堂は住職が修行僧に上堂説法をするための建物である。毎日の朝課や臨時法要などが行われる。本尊として、聖観世音菩薩が祀られる。

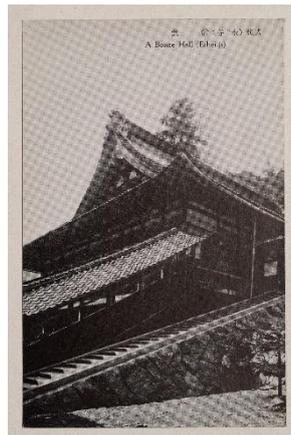
現在の法堂は、天保 13 (1842) 年に上棟した建物に、嘉永 2 (1849) 年の高祖 600 回大遠忌、明治 35 (1902) 年高祖 650 回大遠忌に際しての整備が行われたものである。





法堂内外の新旧写真

- ④ 僧堂 僧堂は修行僧が日々の生活を行う修行の根本道場である。内部には中央に文殊菩薩が祀られ、左右に 82 の単が並ぶ。浴室・東司と合わせて私語を禁じるため三黙道場と呼ばれる。現在の僧堂は明治 35 (1902) 年に高祖 650 回大遠忌を記念して新造されたものである。



僧堂の新旧写真

- ⑤ 大庫院 主な機能としては、修行僧や参籠者の食事を作ることであるが、伽藍の施設保全や本山事務所、来賓用の接待・宿泊施設などが入る。また、正面玄関に祀られる韋駄尊天は、僧堂の文殊菩薩と相對している。
- 現在の大庫院は、昭和 5 (1930) 年二祖 650 回大遠忌に際して改築されたものである。鉄筋コンクリート造を基礎としながら、伝統的な木造建築の意匠を残す近代建築であり、現在も使用されるエレベーターは現存する中では日本銀行本店に次ぐ日本第 2 の古さを誇る。



大庫院の新旧写真



大庫院の新旧写真



大庫院のエレベーター

⑥ その他 重要文化財指定建造物（画像）

- ・中雀門 仏殿正面にあり、大庫院と僧堂を繋ぐ廻廊中央に位置する門。現在の建物は嘉永5（1852）年の高祖600回大遠忌に際して建築されたもの。
- ・大光明蔵 永平寺貫首が説法を行い、門末の僧侶、信徒への説教、対面を行う建物。貫首の居所である不老閣に近接する。現在の建物は、昭和4（1929）年建築のもの。
- ・監院寮 寺務全般を統括する監院の居所。昭和5（1930）年の二祖650回大遠忌に際して建築。
- ・廻廊 諸堂を繋ぐ廊下。重要文化財に指定された廊下は昭和5（1930）年、二祖650回遠忌に際して建築されたもの。
- ・承陽殿本殿・拝殿・承陽門
道元禅師を祀る祖廟で本殿・拝殿からなり、門と廻廊により聖域を結界している。二祖懐奘が境内西北隅に墓を建て、承陽庵と命名したことが始まりである。現在の建物は明治14（1881）年再建のもの。
- ・経蔵 経典の入る輪蔵（回転書架）を納める建物。山門東側の高台に位置する。高祖600回大遠忌に際して嘉永4（1851）年に再建されたと見られる。
- ・松平家廟所門 正保4（1647）年、福井藩三代藩主松平忠昌の墓所として造られ、その

後4墓所を一体とする廟所が形成された。松平家廟所門は、安永7(1778)年の廟所改変の際に、忠昌の墓所入口から現在地に移築されたものである。

- ・舎利殿・祠堂殿 舎利殿と祠堂殿は、檀信徒の位牌を安置し、法要を行うための建物である。舎利殿は嘉永5(1852)年の「永平禅寺全図」で初めて確認されるが、嘉永年間に該当する建物はなく、文久3(1863)年に新造された現存の舎利殿の計画図であったと推測されている。祠堂殿は舎利殿に納まりきれなくなった位牌を請け負うため、舎利殿を東奥に移設し、大正15(1926)年に完成した建物である。

- ・唐門(勅使門) 永平寺貫首の晋山と皇室からの使者が上山する時に開かれる門。現在建物は、天保15(1844)年再建のもの。



中雀門の新旧写真



監院寮内部



大光明蔵内外の写真



監院寮と大庫院



廻廊の新旧写真



承陽殿の新旧写真



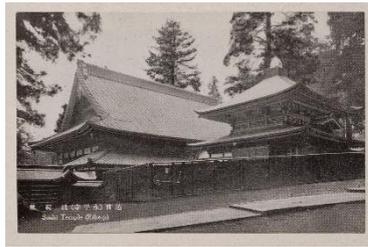
経蔵



松平家御所門



祠堂殿



総祠堂



唐門の新旧写真

